

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 15 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530627

研究課題名(和文) 技術的環境における希薄な身体の身体的基盤 医療と学習の相互行為分析

研究課題名(英文) Embodied foundations for interaction in technological environments

研究代表者

西阪 仰(Nishizaka, Aug)

明治学院大学・社会学部・教授

研究者番号：80208173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、技術的環境における相互行為様式の習得の身体的基盤を捉えようとするものであった。2011年3月に東日本大震災、それに続く原発の爆発による多数の住民の一斉避難という、未曾有の事態が出来た。本研究では、焦点を、福島県下の避難所と応急仮設住宅において行なわれていた「足湯ボランティア」に絞り、ボランティアと避難住民との相互行為様式の諸側面(基本構造、ボランティアの反応の様式、話題の展開の様式、など)を明らかにした。ボランティアは、まったくの新人である場合もある。また、基本的に初対面者どうしの身体接触を伴う相互行為である。このような特殊な状況における相互行為の構造的基盤を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The original purpose of this study was to elucidate the embodied foundations for learning interactional practices in technological environments. One month before approval of the research proposal came out, the Great East Japan Earthquake and the nuclear power plant explosion occurred. Many individuals and families evacuated the affected areas. This study focused on a particular form of volunteering (i.e., footbath volunteering) at emergency shelters and temporary housing sites and investigated various organizational aspects of interaction between evacuees and volunteers. These aspects included the basic interactional structure, volunteers' responding practices, and evacuees' topic-initiation practices. This interaction is distinctive because many volunteers were novices and both participants were unacquainted with each other, although their interactions involved bodily contact. This study elucidated the structural foundations of interaction in this particular form of volunteering.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：相互行為 会話分析 身体 東日本大震災 原発事故 ボランティア

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の代表である西阪は、2002 年度より 2010 年度まで 3 度の科学研究費助成金（西阪代表）により、いわゆる「産婦人科」保健医療における、保健医療専門家（医師、助産師、看護師、技師など）と妊婦の相互行為がどう組織されるかについて、研究を重ねてきた。本研究は、この以前の研究をさらに展開するものとして構想された。例えば、超音波診断装置という道具をもちいた検査においては、いわば、身体の一部が身体から（超音波モニターのうえに）切り離される。一方、このような「身体の切り離し」は、まさに身体的な作業（発話と身体の動きを相互行為のなかで配列する作業）として営まれる。そこから、このような技術的環境における独特の相互行為様式の身体的基盤を、明らかにしようという着想を得た。とくに、上のような「身体の切り離し」は、技術的環境における相互行為様式の習得過程に顕著に現われることが予想された。

一方、本研究の申請後、東日本大震災が起こる。とくに、原子力発電所の爆発事故により、多数の住民の一斉避難という未曾有の事態が出来た。この事態を受け、本研究では、福島県下の避難所と応急仮設住宅で行なわれていた「足湯ボランティア」に焦点を絞り、ボランティアと避難住民の相互行為様式の諸側面を探求することにした。

そのため、当初の課題と若干異なる課題設定になったが、当時の状況のなかでは、研究者として、最善の選択と考えている。一方、「足湯ボランティア」の次のような特徴により、じつは、この新たな課題設定が、当初の構想と、本質的なところで深いつながりを維持している点も、強調しておきたい。

足湯ボランティアは、「傾聴ボランティア」のひとつと言われる。それは、ボランティアが避難住民に足湯を提供し、手と腕をマッサージするという活動だが、そのあいだに様々な会話がなされる。その特徴は、次の 4 点にまとめられる。

- 1) 「道具」(足湯のための湯および桶など)を用いた相互行為である。それだけではなく、避難所もしくは応急仮設住宅という、環境の人工的側面があらわになる場における活動である。
- 2) ボランティアは新人であることが多い。
- 3) ボランティアと避難住民は、初対面であることが多い。
- 4) マッサージという身体接触を伴う相互行為である。

つまり、それは、人工物に媒介された相互行為であり、しかも、新人は、まさにその相互行為のなかで、その相互行為様式を習得しつつ、その相互行為様式を作りだす作業に携わることになる。しかも、初対面

どうしの相互行為であるがゆえに、あらかじめ共有された生活誌情報がまったくない。このような事情にもとづく独特な相互行為様式の構造的基盤に、道具と身体接触が深くかかわっていることも、研究の過程のなかで明らかになっている。このように、新たに設定された課題は、当初の構想と、決して無関係ではない。

### 2. 研究の目的

本研究は、次の 4 点を具体的な目的として設定した。

- 1) 道具と身体への洞察を深める。とりわけ道具のある環境における発話と身体の動きとの時間的・空間的配列の詳細を、足湯ボランティアの相互行為において検討する。
- 2) 足湯ボランティア活動の基本構造を、明らかにする。
- 3) 避難住民が初対面の若者を相手に自身の話題を展開するさいに、どのようなやり方を用いているかを明らかにする。
- 4) 若いボランティアが、避難住民の厳しい経験を聞くとき、どのようなやり方で反応するかを、明らかにする。

このほか、身体接触を伴う相互行為の研究として、在宅マッサージにおける相互行為の分析にも取り組み、いくつかの知見を得ることができた。(この成果報告では、この知見に触れない。2013 年度の実績報告を参照されたい。)

### 3. 研究の方法

本研究の採用する方法は、「会話分析 (Conversation Analysis)」である。会話分析は、実際の (実験ではない) 相互行為の録画による記録をデータとし、人びとが実際に行なっていることの組織を明らかにしようとするものである。そのために、次の作業を行なった。

- 1) 実際の相互行為をビデオに収録した。
- 2) その音声部分を詳細に書き起こした。
- 3) 注目する現象を含む断片のコレクションを作成した。
- 4) その断片一つ一つを詳細に分析した。

足湯ボランティアにおける相互行為を、全体で約 90 例収録したが、とくに、震災発生から 2 年間のデータを集中的に書き起こし、分析した。

研究代表と研究協力者のあいだで、定期的にデータの検討会も持った。2011 年度は、協力いただいた現地ボランティアに向けて、2 つの中間報告を作成し、それにもとづき、現地ボランティアとのワークショップも行った。

### 4. 研究成果

ここでは、足湯ボランティア (以下、足湯) の相互行為分析の結果より、基本構造、避難住民による話題の開始、ボランティアの反応の 3 点に限定して、概略を述べてお



図1 ボランティア(左)は、手のマッサージをしながら、避難住民の話の聞いている。

く。詳細は、「主な発表論文等」における図書(『共感の技法』勁草書房)を参照されたい。

#### (1) 基本構造

足湯は、典型的な複合活動である。すなわち、一方で、手のマッサージ・足湯の提供という活動があり、他方で、会話という活動がある(図1参照)。いずれも、ボランティアにより、重要な要素として捉えられている。足湯における相互行為は、マッサージと会話が、基本的に同時並行して行なわれる活動である。この2つの活動の関係は、「基底-随伴」「主要-副次」という2つの軸によって整理することができる。すなわち、マッサージと会話は、基本的に、それぞれ、基底的活動と随伴的活動に分類できると同時に、両者はそれぞれ、(会話が進行しているかぎり)副次的活動と主要な活動に分類できる。

この基本構造は、相互行為参加者によって志向された規範的構造である。このことは、1) マッサージ・足湯提供の手順に関する発話の産出のされ方、2) マッサージの進行の調整のされ方のうちに、見てとることができる。

#### 手順発話の産出

マッサージ・足湯提供は、手と足を用いて行なわれる活動であり、会話は口と耳を用いて行なわれる活動である以上、両者が同時進行することは、原理的に可能である。しかし、マッサージ・足湯提供は、しばしばその手順に関する発話を含む。手順発話の産出は、会話の進行と競合しうる。

じつは、そもそも手順発話は、さほど多く産出されない。が、産出されるときも、多くの場合、話題の切れ目(1つ話題が終わり、次の話題が開始されるまでの間)において産出され、その前後に多少の沈黙がある。しかし、それでも、手順発話が会話の進行と競合する場合がある。その1つの例が、以下のものである。避難住民は、ある海岸を襲った津波のことを話していた。事例1では、そのうちの第一波について言及している。(事例で用いている記号の一覧は、<http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm>にある。)

#### 〔事例1〕

- 1 住民: 一波はな: 一波は だいたい
- 2 六メートル: #:#-

- 3 [六メートルの]
- 4 ボラ: → [>° 手のマッサージしま] ↓ す: °° <
- 5 住民: 海岸には- ° それよりちょっと
- 6 上 ↓ だ ↑ な? °
- 7 ボラ: ° ん: : ン °
- 8 住民: ちょ- あの 防波堤あんのな?

4行目でボランティアは、3行目の住民の発話と重なりながら、手順発話を産出している。この手順発話の産出には、まずは、2つの特徴がある。第1に、小さい声で、しかもすばやく産出されている。第2に、1~2行目の住民の発話には、いくつかの言いよどみがある。ボランティアの手順発話は、とくに2行目の末尾で「六メートル」の「ル」音が、詰まった声で引き伸ばされるところで、産出されている。この2つの特徴から、手順発話は、住民の発話と重なりながらも、その発話の進行の阻害が最小になるよう組み立てられていると言えよう。つまり、ここに、会話のほうが「主要」な活動として志向されていることが、見てとれる。

その一方、手順発話は、いわば、「ちょっと」「すみません」などの)標識を伴うことなく、すなわち無標で産出されている点にも注目したい。つまり、マッサージへの志向が、いわば遍在している可能性が示唆されている。この点は、次の事例で確認できよう。

#### マッサージの進行の調整

研究協力者の須永将史が観察したように、会話の進行に合わせて、マッサージの進行が停滞することがある。次の例は、マッサージの進行の停滞の最も単純な例である。避難住民は、応急仮設住宅の割り当て方が機械的であるため、同じ村の出身であっても、知りあいと同じ仮設住宅に入れるとはかぎらないと、訴えている。ボランティアは、住民の右手をマッサージしている。

#### 〔事例2〕

- 1 住民: すつと:: (0.6) と-<sup>\*1</sup>となりん
- 2 すと[人]がだ- 同<sup>\*2</sup>じ:
- 3 む- [むら<sup>\*3</sup>でも:
- 4 ボラ: [°<sup>\*4</sup> ン: ン °

\*1 ボランティアは、マッサージの手を止め、顔をあげて住民を見る。その姿勢を3行目まで続ける。/\*2 ボランティアは、自分の左手で住民の前腕を支える(図1)。/\*3 ボランティアは、下を見ながら、住民の右手を離す。/\*4 ボランティアは、続けて数度首を縦に振る。

1行目で住民の発話が、際立ってよどむとき(とくに0.6秒の間があくとき)、ボランティアは、顔をあげて、住民の顔を見、同時に、自分の手の動きを停止し、その状態をしばらく維持する。手がふたたび動き始めるのは、言いよどみが解消されたときとみなしうる時点、すなわち、2行目の「同じ」が発せられた時点である。つまり、ボランテ

ィアは、住民の発話によどみが生じたとき、マッサージの進行を犠牲にして、「聞き手であること」を、強めているように見える。

さらに、ボランティアは、最終的に住民の右手を離すが、そこにいたるまでに、わざわざ左手で住民の前腕をいったん支えてから、手を離す。この「時間稼ぎ」にも見える振舞いは、住民の言いよどみが完全に解消されていない可能性への志向を表わしているようにも見える。また、手を離す直前に何度も頷くことも、「聞き手であること」を強めるだろう。

このように、住民の発話の進行に合わせて、マッサージの（終了に向かう）進行を弱め、聞き手であることを強く行なうことは、マッサージよりも、会話のほうが主要な活動と把握されていることの証左であるように思う。

一方、マッサージの進行が停滞させられるときも、マッサージの姿勢はずっと維持されている。つまり、現在なおマッサージが行なわれつつあることへの基本的な志向が示される。ここから、マッサージが、たとえ副次的な活動であるとしても、この相互行為の基底をなしているという（ボランティア自身の）把握が、見てとれよう。

#### 結語

このような基本構造のゆえに、足湯におけるコミュニケーションは、会話者たちにとって非常にやりやすいものになっているように思える。つまり、マッサージが基底的な活動として維持されるかぎり、相互行為の外延は、マッサージ活動の外延と一致する。だから、会話が途切れても相互行為が途切れるわけではない。その分、話題を維持することの負荷が軽くなっているようにも思える。

#### (2) 避難住民による話題の開始

足湯においては、一方で、住民の様々な話に耳を傾けることが要求されるが、他方で、その話が自由に語りだされるのを、ボランティアは待つしかない。しかし、住民の自主的な語りだしは、いくつかの秩序立ったやり方で達成される。そのうち際立ったやり方を、1つ紹介しておこう。

会話は、ほとんどの場合、ボランティア側からの問いかけによって開始される。その問いかけは、その場で誰もが気づきうること（天気や、その住民が身に着けているものなど）を取り上げることが多い。しかし、この問いかけから始まるやりとりは、それに続く住民からの返答、その返答のボランティアによる受け止めという、3つの発言順番で終了しうる。この3つ目の発言順番のあと、住民にふたたび発言機会が生じるが、住民は、それを利用することもしないこともある。

もちろん、住民は、この機会を利用して、

新たな話題を導入することがある。そのやり方として次の3つが観察できた。いずれも、そのときにその話題を導入することの正当化が組み込まれている点に、注意したい。

- 1) いま終了したやりとりの内容と関連付けが可能なことがらを導入する。
- 2) その日もしくは前日など、直近に経験した「語るに値すること」を導入する。
- 3) 自分がいま与えた返答に何らかの操作を加えながら、新たなことがらを導入する。

この3つ目のやり方は、「応答の拡張」と呼べるものである。返答への操作として、正当化、言い訳、明確化、限定、さらに、関連する情報の追加などがありうる。1つだけ簡単な例を引用しておこう。

事例3は、避難所でやりとりである。最初に、ボランティアがどこの住民であるかを尋ねた（1行目）のに対して、避難住民は、「AAA町」（避難指示区域内）と答える（2～3行目）。その返答を、ボランティアは、復唱とともに、「ああ」「ふーん」という新情報を得たことを示す標識によって受け止める（4～6行目）。

#### 〔事例3〕

- 1 ボラ: どちらのかた なん↓で「すか
- 2 住民: 「あたしは
- 3 い- (.) AAA ↓です [:.:
- 4 ボラ: 「ああ
- 5 ボラ: AAA の↑かた↑↑なん↓です↓ね:::
- 6 ふ:::ん
- 7 住民: →AAA はどうせ入れないから
- 8 ボラ: ああ::: そうですよね::::

住民は、7行目で、応答拡張を行なう。この発話は、「から」という表現で終えられている。すなわち、「から」の後に来るべきことがらが仄めかされる言い方になっている。

まず、1行目の「どちらのかた」という問いかけの微妙なニュアンスに注意したい。現在避難中とはいえ、住民は、あくまでも避難元の地域住民である。ボランティアの問いかけは、このことに敏感に構成されている。一方、AAA町は、入ることもできず、いつ帰れるかもわからない。このような状況において、住民の応答拡張は、自分の返答に制限を加えるものとして聞くことができる。つまり、AAA町の住民であっても、いまは住民票上のことだ、と。

確かに、この応答拡張において示唆されたことそのことが、実際に新たな話題に展開することはなかった（ここから、ボランティアは、避難所の次の住居となる仮設住宅に関する問いへとつなげていく）。しかし、応答拡張は、住民の抱えている「問題」を示唆する形でなされることも、少なくない。事例3であれば、自分の町に入れませんが、住民の「問題」として示唆されているように見える。とりわけ、「どうせ」という言い方が、その発言の「問題示唆的」性格

を際立たせている。

最後に次の点も注意しておこう。応答拡張は、住民が、ボランティアの振舞いとは無関係にいわば一方向的に行なうことではない。事例3の4~6行目でボランティアは、住民の直前の返答を受け止めるとき、2つの順番構成単位を用いている。つまり、最初の単位のあとに、十分引き伸ばされた「ふーん」を付け加えることにより、すぐに次の問いかけに移らず、住民に対して、十分な発言の機会を用意しているように見える。住民の応答拡張は、この用意された機会を利用したものであるかぎりにおいて、むしろ、ボランティアとの協働の成果物とも言えるように思う。

### (3) ボランティアの反応

ボランティアは、避難住民の語りに対してどのようなやり方で反応するのか。いくつかの特徴的なやり方が見出されたが、ここでは、1つだけ紹介しておく。それは、いわば「遅れた共感」と呼べるようなものである。

次の例における住民は、やはり避難指示区域から避難住民で、当時、仮設住宅で生活していた。住民は、自分の犬をいま、専門のボランティアに頼んで預かってもらっていると話している。

#### 〔事例4〕

- 1 ボラ: 預かってもらってるん [↓だ:  
2 住民: [ボラン  
3 ティアのか [た↓に ( )  
4 ボラ: [あ↑そうなん  
5 ↓だ [↓:  
6 住民: [↑ん:: [::↓ん  
7 ボラ: [あ=じゃあ  
8 よかった:::]

この例の直前で、住民は「(犬をひとに)頼んでいる」という言い方をし、自らを受益者と位置付けていた。ボランティアは、住民のこの態度に沿う形で、上の事実を肯定的に評価している(8行目)。研究協力者の早野薫にならって、このような反応を共感的反応と呼ぼう。

さて、このやりとりのあと、住民は、かつて犬をたくさん飼っていたが、年をとって死んでしまい、最後に残ったのは2匹だけだったと語る。次の例の1行目では、ボランティアは、その残った犬の年齢を尋ねている。

#### 〔事例5〕

- 1 ボラ: 何歳↓ぐ↓らしいの犬なんですか?  
2 (0.2)  
3 住民: いま生きてん↓のがね:::  
4 ↑八歳 [↓か↑な  
5 ボラ: [ああ:そう:::  
6 住民: 八歳↓と二歳↑は↓ん  
7 (2.4)  
8 ボラ: → でも ↓あず↑かかってもらっ↓て

9 よ↑かった↓ね [↓:

10 住民: [ん:?

11 ボラ: 預かってもらっ↓てよ↑かっ↓た:

ここでとくに注目したいのは、8行目のボランティアの発話である。それは、いくつかの特徴がある。1) この発話は、直前の発話に結び付いていない。「預かってもらって」および「よかった」という表現が再度用いられることにより、明確に、上の事例3のやりとりに結び付けられている。2) 「でも」という逆接表現が用いられているが、「預かってもらってよかった」とことと、直前の犬の年齢に関するやりとりとは、逆接的關係にあるようには見えない。3) 10行目の住民による聞き返しに答えて、ボランティアは、11行目で8行目の発言をほぼそのまま繰り返している。しかし、「でも」は繰り返されていない。このことから、「でも」はあくまでも、8行目の直前のやりとりと関わるものであることがわかる。11行目は、8行目の直前のやりとりから引き離されている以上、「でも」は不要となっている。4) 事例4の7~8行目においても、「でも」は用いられていない。以上より、ここでボランティアが行なっていることを、次のように記述できるだろう。直前のやりとりを飛び越えて、以前のやりとりに現在の発話を結び付けること、このことを、発話のデザイン(どのような表現を用いるか)と「でも」の使用によって成し遂げている、と。

じつは、日常会話においては、「でも」を伴う遅れた共感的反応は、あまりない。足湯の場合、避難住民の心情を考慮すると、すぐに共感を示しにくいこともあるだろう。あるいは、避難住民の語りに様々な関心を示しながら、あくまでも同調的な態度でそれに耳を傾けるということもあるだろう。遅れた共感とは、このようなボランティア自身の「問題」への1つの解決でありうる。

一方、この反応は、あくまでも単なる「同調」にすぎないようにも見える。しかし、それは、いわば「絞り出された同調」である。そこには、様々な気遣いが絞り込まれている。このような同調は、共感の1つの技法というべきだろう。

### (4) まとめ

足湯における相互行為の構造的な諸相について、以上のように解明することができた。この知見が、コミュニケーションを主眼とするボランティアの今後の展開に、なんからの貢献を果たすものであることを期したい。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者  
には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

Aug Nishizaka. (2014). Instructed perception in prenatal ultrasound examinations. *Discourse Studies*, 16(2), 213-242. 査読有

doi: 10.1177/1461445613515354

西阪仰, 小宮友根, 早野薫. (2014). 山形 119 番通報の会話分析. 『研究所年報』 44, 3-16.

Aug Nishizaka. (2013). Distribution of visual orientations in prenatal ultrasound examinations: When the healthcare provider looks." *Journal of Pragmatics*, 51, 68-86.

DOI: 10.1016/j.pragma.2013.02.007 査読有

西阪仰, 黒嶋智美, 早野薫, 坂井愛理. (2013). 在宅医療の相互行為 『研究所年報』 43, 9-26.

Aug Nishizaka. (2012). Doing 'being friends' in Japanese telephone conversations. In H. Nasu and Frances C. Waksler (Eds.), *Interaction and Everyday Life: Phenomenological and Ethnomethodological Essays in Honor of George Psathas*, Lexington Books, 297-314.

西阪仰, 須永将史, 黒嶋智美, 早野薫, 岩田夏穂. (2012). 避難者の語りの開始 「足湯」ボランティアにおける相互行為の一側面. 『研究所年報』 42, 3-23 頁.

Aug Nishizaka. (2011). Response expansion as a practice for raising a concern during regular prenatal checkups. *Communication & Medicine*, 8(3), 247-259. 査読有  
DOI: 10.1558/cam.v8i3.247

Aug Nishizaka. (2011). 'Essere amici' nella conversazione telefonica giapponese. (Enrico Caniglia 訳) *Quaderni di Teoria Sociale*, 11, 193-214.

西阪仰. (2011). 身体化された知覚 出生前超音波検査の相互行為組織の一側面. 『年報社会学論集』 24, 12-23 頁.

Aug Nishizaka. (2011). The embodied organization of a real-time fetus: The visible and the invisible in prenatal ultrasound examinations. *Social Studies of Science*, 41, 309-336. 査読有  
DOI: 10.1177/0306312710386842

[学会発表](計 5 件)

Aug Nishizaka. The interactional organization of multiple activities in "footbath volunteer activity" in Fukushima. *American Sociological Association*, August 11, 2013, New York, USA. 査読有

Aug Nishizaka. Instructed perception: In-situ learning of seeing in prenatal ultrasound examination. *International Institute for*

*Ethnomethodology and Conversation Analysis*, August 6, 2013, Waterloo, Canada.

Aug Nishizaka. Repositioning affiliative responses. *International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis*, August 7, 2013, Waterloo, Canada.

西阪仰. 福島県における避難者とボランティアの相互行為 (3). 日本社会学会 85 回大会, 2012 年 11 月 3 日, 札幌学院大学.

Aug Nishizaka. An aspect of the Organization of participation in prenatal ultrasound examinations. *American Sociological Association*, August 20, 2011, Las Vegas, USA. 査読有

[図書](計 1 件)

西阪仰・早野薫・須永将史・黒嶋智美・岩田夏穂. (2013). 『共感の技法: 福島県における足湯ボランティアの会話分析』 勁草書房, 228 頁. [代表者以外の著者は, すべて研究協力者]

[産業財産権]

なし.

[その他]

ホームページ:

[www.meijigakuin.ac.jp/~aug/kaken\\_11.html](http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/kaken_11.html)

6. 研究組織

(1)研究代表者

西阪 仰 (NISHIZAKA, Aug)

明治学院大学・社会学部・教授

研究者番号: 80208173

(2)研究分担者

なし.

(3)連携研究者

なし.

(4)研究協力者

早野 薫 (HAYANO, Kaoru)

お茶の水女子大学・外国語教育センター・

専任講師

研究者番号: 20647143

岩田夏穂 (IWATA, Natsuho)

大月短期大学・准教授

研究者番号: 70536656

黒嶋智美 (KUROSHIMA, Satomi)

明治学院大学・社会学部付属研究所・研究員

須永将史 (SUNAGA, Masafumi)

首都大学東京大学院・社会学専攻・大学院生